「1日1万円の神様」

林実歩

あらすじ

テレビ番組の現場で働く美雪は、ミスをして上司の本村に怒鳴られる毎日。働くことが怖くなり、生きる気力すらも無くしかけていた美雪は、コンビニの脇にある小さな祠に「明日は上手くいきますように」と祈ることが日課になっていた。

ある日仕事で大きなミスをし、帰り道で涙が溢れ出す。その時、突然日向に手を取られ、夜道を2人で駆ける。美雪は、神様が助けに来てくれたのだと感じる。

日向は『人生代行サービス』の提供者で、1日1万円で美雪の代わりに仕事に行くことを提案する。突然のことに戸惑う美雪だが、日向の熱量に押され代行を頼むことになる。

美雪の代わりに出勤した日向は、愛嬌のよさで周囲に気に入られ、慣れない仕事も乗り切っていく。美雪は自分がいなくても大丈夫だと分かると、仕事に戻れなくなり、毎日テレビゲームをして過ごす。日向は美雪の代わりに働き続ける。

日向は、日に日に疲弊していき、現場でぼーっとすることが多くなる。

美雪は、ダラダラするだけの生活に罪悪感を感じ、何か役に立つことをしようと、料理をして仕事終わりの日向に届けることを始める。駅までの道を2人で話しながら帰る生活が続き、美雪は今後の仕事について相談する。そして、日向に言われた「怖がらないで前を見る」という言葉に、心を動かされる。

翌日、美雪は日向に代わってもらうのをやめると決心する。その時、一本の電話が鳴り、日向が倒れたと連絡が入る。美雪は急いで病院に向かう。日向が倒れた原因は疲労と睡眠不足であった。自分のために身を削って働く日向の動機が知りたくて、問い詰める美雪であったが、日向からはそれらしい答えを聞くことができ

なかった。

その帰り道、美雪はコンビニで強盗に遭い、ナイフを突きつけられる。その時美雪は、久しぶりに「死にたくない」と強く感じ、暴れて抵抗する。店員の後藤の対処により強盗は逮捕され、美雪は助かった。後藤に、コンビニの脇の祠は不法投棄を防ぐためのもので、神様は祀られていない、すなわち今生きているのは神様じゃなく自分のおかげだと言われた美雪は、自信がみなぎり、日向のもとへ走り出す。

再びやって来た病室で、美雪は日向に「助けてって言ってください」と懇願する。ぽつりぽつりと言葉をこぼした日向が告げたのは、亡くなった元恋人の千春を救えなかった後悔と、人生代行の仕事をすることでその過去を塗り替えようとする自分への嫌悪だった。言葉を失う美雪。しかし、過去が1つでも欠けていたら今の日向はいないと気付く。日向と手を取り合って生きていたいと強く思う美雪。

美雪は退職し、仕事を探しながらコンビニでアルバイトを始める。日向は再び人生代行サービスの仕事をしている。

千春の墓を掃除する美雪と日向。日向はやっと千春と向き合うことができるようになった。

人物関係図

戸田美雪（２５）　アシスタントディレクター
天野日向（２３）（２５）　人生代行サービスの提供者
冨岡　遥（２５）　カメラアシスタント
後藤裕太（２１）　コンビニ店員
神田麻子（４０）　人生代行サービスの代表
影山千春（享年２３）　日向の元恋人
本村　明（４８）　ディレクター
源　亮子（３５）　アナウンサー
山崎　聖（２０）　大学生
男子大学生
喫茶店の店長
強盗犯

○　テレビ局・スタジオ

一生懸命に大根をすりおろす手。

美　雪　M「生きていればいつの日か、神様が現れて、こんな世界から連れ出してくれる。幸せになれる」

○　繁華街

美　雪　M「そんな風に、ずるずる生きて、少しずつ削られていく」

男子大学生が待ち合わせ場所で待っている。

天野日向（２５）、やって来る。

日　向「山崎聖さんのお友達ですか？」

大学生、怪しむように日向を見る。

大　学　生「…そうですけど」

日向、にこにこと笑う。

日　向「お待たせしました。じゃあ、行きましょうか」

大学生、スマホの画面と日向を交互に見る。

大　学　生「あ、あの…天野さんですか？」

日　向「はい。美術館楽しみですね。行きましょう」

大学生、戸惑いながらも日向の後を歩いて行く。

家電量販店のショーウィンドウ。展示されたテレビに生放送のワイドショーが映っている。

カラフルなセットの中に源亮子（３５）と、数人のゲストが座っている。

源「さあ、話題のちょい足し料理、おろしポン酢トーストをスタジオにご用意しました！」

料理が出てこない。キョロキョロする出演者。

源「…もう少々お時間かかるようですね。ゲストの皆さんは一押しのトッピングなんてあったりしますか？」

○　テレビ局・スタジオ

本村明（４８）、「つないで」と書いたカンペを出し、険しい顔で後ろを睨む。

睨んだ先、スタジオの隅であたふたと大根をおろす戸田美雪（２５）。その前には焼けた食パンが並ぶ。

美　雪「（小声で）すみませんすみませんすみません」

無我夢中で大根をおろす美雪。

○　同・廊下

本村、フリップの束を床に投げつける。

本　村「戸田、いい加減にしろ！」

美　雪「すみません！」

本　村「資料も作れない、アポも取れない、あげくの果てに大根おろしもできないのか？お前さ、逆に何ができんの？」

美雪、萎縮して下を向く。

美　雪「…すみません」

冨岡遥（２５）、機材を運びながら横を通り、密かに本村を睨む。

○　テレビ局の前（夜）

美雪と遥、並んで歩く。

遥「あいつほんとムカつく！」
美　雪「ちょっと遥。声大きいよ」
遥「だってムカつくじゃん。今度私がガツンと言ってやろうかな」
美　雪「やめてよ。私が我慢すればいいだけだし」
遥「なんで美雪が我慢しなきゃいけないの」
美　雪「…私が、ダメだから」
遥、美雪の肩を叩く。
遥「まあ、私たちも昇進したらマシになるかもね。その時にはディレクターとカメラマンだね」
美雪、浮かない顔。

○　バス・中（夜）

ぎゅうぎゅうの満員。吊り革に掴まる美雪、隣の乗客にぶつかり睨まれる。
おかしいほど体を細くしようとする美雪。

タイトル『1日1万円の神様』

○　コンビニ・表（夜）

店の脇、ゴミ捨て場の横に３０ｃｍ程の小さな祠。
美雪、しゃがんで手を合わせる。
美雪「神様お願いします。明日は怒られませんように」
美雪、手のひらに息を吐いて温める。立ち上がり、店に入る。

○　同・中（夜）

美雪、かけうどんをレジに持ってくる。
店員の後藤裕太（２１）、美雪に会釈する。気付かない美雪。

後　藤「温めますか」

美　雪「大丈夫です」

後　藤「４８０円です」

○　美雪のアパート・外観（夜）

古びた２階建てのアパート。美雪、階段を上る。

○　同・中（夜）

美雪、部屋に入り靴を脱ぎ捨てると、床に座り込む。

美　雪「はあー。疲れた。もうやだやだやだ」

○　テレビ局・スタジオ

生放送中。美雪、セットの袖であんみつの乗ったトレーを持つ。緊張した表情。

源「それでは、話題の極上あんみつ、スタジオでいただきましょう！」

本村、美雪に目線で合図を出す。

美雪、あんみつを一つ一つ出演者の前に置いていく。

美　雪「あっ」

美雪、つまづいて源の服に汁がかかる。

源「きゃっ」

美　雪「すみません！」

源、美雪を押してはけさせる。

源「私のお洋服も食べたがってますね。さあ、皆さんで実食しましょう」

笑うゲスト達。

本　村「タオル！」

スタッフはあたふたしている。

○　同・廊下

源の衣装のシミを取るスタッフ。

本村、機材を運んでいる。美雪、早足で追いかける。

美　雪「あの、本当に申し訳ございませんでした」

本村、美雪を無視して歩く。

美　雪「すみませんでした。…本村さん」

本村、振り返り、意外にも落ち着いた様子。

本　村「俺に謝ってどうなるの？怒られたくないから、とりあえず謝っとこうって感じでしょ？」

美雪、返す言葉もなく。

本　村「大丈夫怒んないから。もう来なくていいわ。お前」

○　テレビ局の前（夜）

遥、美雪の背中をさすって歩く。

遥「いやーなんか今日セットの床ツルツルしてたからさ。私なら

派手に転んでたと思うよ」

俯く美雪。

遥「あんみつなんて多分洗えば落ちるし大丈夫だよ」

遥、心配そうに美雪を見る。

遥「寒いねー。見て、私今日カイロ４枚貼り」

○　コンビニ・表（夜）

美雪、祠に手を合わせる。重い足取りで店に入る。

○　同・中（夜）

会計中のかけうどん。後藤、レジを打ちながら、美雪を一瞥する。

後　藤「温めますか」

美　雪「大丈夫です」

後　藤「４８０円です」

美雪、小銭を落とす。あちこちに散らばる小銭。

美　雪「あっ。すみません」

しゃがんで小銭を拾う美雪、泣きそうな顔。

○　路地裏（夜）

日向と山崎聖（２０）、向かい合って立っている。

山　崎「本当にありがとうございました」

日　向「いえいえ。いつもお疲れ様です。またいつでも連絡してくださいね」

山崎、日向に１万円札を渡す。

○　道（夜）

とぼとぼ歩いていた美雪、涙が込み上げる。

美　雪「ううっ…」

美　雪　M「神様、もう限界です」

美　雪「助けてください…」

立ち止まり、声を殺して泣く美雪。

突然何者かに手を取られる。驚き顔を上げると、

日向が目の前にいる。

美　雪「え」

日　向「ついて来て」

日向、美雪の手を引き、走り出す。

夜風を切って走る2人。

戸惑っていた美雪、だんだんと日向の背中に見惚れていく。

美　雪「神様だ…」

○　公園（夜）

ベンチに並んで座る美雪と日向。

美　雪「あの、あなたは？」

日　向「天野日向といいます。偶然通りすがって、泣いてたから心配で。急に引っ張ったりしてごめんなさい」

美　雪「大丈夫です。いや、びっくりしましたけど」

日　向「僕が言うのも変ですけど、不用心じゃないですか？知らない人について来るなんて」

美　雪「…別にいいんです。今あなたに殺されたとしても構わないって思います」

日　向「え？」

日向、怪訝そうに美雪を見る。美雪、俯く。

日　向「そんなこと言わないでくださいよ」

美　雪「…冗談です」

日向、安心して肩を落とす。

日　向「冗談に聞こえませんでした」

美　雪「さっき、少しだけ救われた気がしました」

日　向「救われた？何からですか？」

美　雪「(悩んで) 仕事…というか、人生？うまく言えない」

日　向「…名前は？」

美　雪「戸田美雪です」

日　向「美雪さん」

美雪、顔を上げる。

日　向「僕が代わりに生きてあげようか」

美　雪「…え？」

日向、鞄から名刺を取り出し、美雪に渡す。

『人生代行サービス　天野日向』と書かれている。

美　雪「人生代行…どういうことですか？」

日　向「そのまんまですよ。僕が、美雪さんの人生を代わりに生きるってことです。仕事も、人付き合いも、なんでも」

美雪、訳が分からないという表情で名刺を見ている。

美　雪「よく分かりません。揶揄ってるなら…」

日　向「これが僕の仕事なんです。人生から逃げたいんでしょ？僕が代行してる間、あなたは何もしなくていい」

美　雪「何も…」

日向、料金が書かれたチラシを見せる。ポップなイラストが描かれている。

日　向「食費、交通費込みで１日きっかり１万円。僕が代わりに働いた分のお給料は、全額美雪さんに支払われる。悪くないでしょ？」

美　雪「すごく素敵だと思います。でも、私は仕事しないと」

日　向「そうですか。お仕事は何を？」

美　雪「ＡＤです。テレビの」

日向、大袈裟に感心する。

日　向「へえ、すごい。どうしてＡＤさんになろうと？」

美　雪「なんとなく、楽しそうだと思ったんです。単純な気持ちで入ったら、思ったより厳しくて」

美雪、笑顔を作る。

美　雪「とにかく、私は大丈夫です」

日　向「美雪さん。誰かに助けてって言うことは、情けないことなんかじゃ決してないんです」

日向、まっすぐ美雪を見つめる。

日　向「むしろ僕は、それこそが生きるための強さだと思います。どうか僕を信じてください」

葛藤する表情の美雪。瞳が揺れる。

○　美雪のアパート・外観（朝）

○　同・中（朝）

美雪、ビデオ電話の日向に話す。

美　雪「本当に大丈夫なんですか？私やっぱり…」

日　向　の　声「任せてくださいってば」

画面の日向、美雪の職場に向かっている。

日　向「この階段ですか？」

美　雪「はい。あとまっすぐ行けば着きますけど…」
日　向「了解です。また何かあったら連絡するので、今日はゆっくりしてください。では」
美　雪「あ、ちょっと」
電話が切れる。
美雪、呆然と画面を見つめる。やがて眠気に襲われ、布団に倒れ込む。

○　テレビ局・オフィス（朝）

イライラした様子の本村。日向、やってくる。
本　村「戸田、遅い…え？」
日向、名刺を差し出す。
日　向「本日、戸田美雪さんの代わりで来ました。人生代行サービスの天野日向です」
本　村「は？」
本村、困惑して名刺と日向の顔を交互に見る。
遥、驚いた顔で日向を見る。
日　向「今日は僕を美雪さんだと思って接してくださいね」
本　村「人生代行サービス？ふざけてんのか？あいつ本当にどうしようもねえな」
本村、スマホを操作しながら出ていく。遥、日向に駆け寄る。
遥「どちら様ですか？美雪の知り合い？」
日　向「天野日向です。よろしくお願いします！」
遥「（困惑して）美雪は？」

○　美雪のアパート・中（朝）

美雪、気持ちよさそうに眠っている。
傍に置かれたスマホに着信。「本村D」の表示。
気づかず眠る美雪。

○　テレビ局・廊下（朝）

電話が繋がらない本村。
本　村「こいつ舐めやがって…」
本村、スタジオに入っていく。
本　村「（日向に）そこの、お前、ADの仕事は分かんの？」
日　向「やったことないですけど頑張ります！」
本　村「ああもう！」

○　美雪のアパート・中

美雪、寝癖頭でカップ麺を啜る。
テレビにワイドショーの生放送が映っている。
源「続いてはこの冬食べたいホカホカグルメ特集です」
美　雪「普通にできちゃってるじゃん」
美雪、テレビを消す。
美　雪「本当に今日は何もしなくていいんだ。神様、ありがとう！」

○　テレビ局・スタジオ

生放送が終わり、片付けている。日向、本村にフリップの束を渡す。

日　向「本村さん、仕分け終わりました」
本　村「天野。お前戸田より使えるな」
日　向「はい？」
本　村「今日来たばかりでこの働きぶりだろ？優秀だよ」
日　向「皆さんのおかげです」
本　村「（周りのスタッフに）謙虚さも持ってるのか。素晴らしいね」
日向、スタッフと分け隔てなく話している。

○　美雪のアパート・中（夕）

窓から差し込む夕日。
美雪、テレビゲームをしている。
美　雪「久々にやると難しいなあ」
と、スマホに着信。日向からである。
日　向　の　声「美雪さーん。今お仕事終わりましたよ」
美雪、目を輝かせる。
美　雪「日向さん。最高です！ありがとうございます」
日　向　の　声「あはは。ちょっとは休めましたか？」
美　雪「はい。おかげ様で。大丈夫でしたか？職場の人とか…」
日　向　の　声「はい。皆さん優しくて良い人ですね」
美　雪「…そうですか」
美雪、逡巡する。
美　雪「あの、明日もお願いしていいですか？」
日　向　の　声「もちろんですよ」

○　テレビ局・会議室（朝）

日向、部屋に入る。本村と、十数人のスタッフが座っている。

日　向「おはようございます。今日も美雪さんの代わりで来ました。天野日向です。よろしくお願いします」

本　村「天野か。おはよう。打ち合わせ始めるから座って」

○　美雪のアパート・中

美雪、テレビゲームをしている。しばらくして、コントローラーを置き、伸びをする。

美　雪「はあ…何この生活。最高じゃん」

スマホに遥から『今から会えない？』とメッセージがくる。

○　カフェ・外観

オフィス街の一角。クリスマスの装飾が施されている。客はちらほら。

○　同・中

美雪、落ち着かない様子で座っている。

遥、やって来て、

遥「美雪！よかった生きてた」

遥、荷物を席に置き、美雪の正面に座る。

遥「ごめん待った？収録押しちゃって」

美　雪「遥…ごめん。怒ってるよね」

遥「怒ってるっていうかさ」

遥、メニューを開く。

遥「コーヒー？」

美　雪「うん」

×　×　×

コーヒーを飲む美雪と遥。

遥「へー。1日1万円で人生代行か。色んな商売があるもんだね」

美　雪「うん」

美雪、おずおずと遥の顔色を伺う。

遥「まあ、満足したら戻って来なよ」

美　雪「え？」

遥「そんなに長い間頼めるお金もないでしょ？」

美　雪「…うん。お給料が貰えるとはいえ差額の2万円くらいだし、今は貯金から生活費に回してて」

遥「なるほどね。もともと長期間頼ませないようにしてるのかもね」

美　雪「そっか…」

遥「ごめん。そろそろ行かないと。また連絡するね」

遥、コーヒー代を置いて店を出る。

呆然とする美雪。

○　テレビ局・オフィス

本村、電話している。

本　村「それでですね、急で申し訳ないんですが、来週のクリスマス当日にそちらから中継をさせていただくことは可能でしょうか。…そうですか。失礼いたしました」

本村、電話を切り、イライラした様子で店のリストにバツをつける。ほとんどの店にバツがついている。

日向、やって来る。

日　向「本村さん」

本　村「今話しかけんじゃねえよ！俺暇そうに見えた？」

日向、驚く。遥や周りのスタッフ、またやってるよと本村を冷たい目で見る。

本　村「ったく、１週間前に取材キャンセルとか有り得ねえだろ」

日向、観察するように本村を見つめる。

日　向「明日の生中継のお店探してるんですよね。いちごのスイーツがある都内のお店か…」

日向、店のリストを手に取る。

本　村「ああそうだよ」

日　向「前に代行をした時に働いていたお店が、いちごのパフェが人気でしたよ。このリストにはありませんけど」

本　村「それ、今連絡取れるのか？」

日　向「もちろんです。優しい店長さんでしたし、お客さんもそこまで多くないので、ＯＫしてくれるかもしれません」

本　村「はあ…頼む」

本村、机に倒れ込む。日向、本村の背中を撫でる。

日　向「本村さん。１人で抱えすぎないでくださいね。みんなで一緒に頑張りましょう」

本村、顔をあげ、微笑む。

本　村「ごめん。ありがとう」

遥、不思議そうに２人を見る。

○　同・廊下

日向、自動販売機に向かう。先に遥がコーヒーを買っているのが見える。

遥、日向に気付いて、

遥「優しいですね」

日　向「え？」

遥「さっき」

日　向「ああ。いえ、できることをしただけですよ」

遥「何飲みます？奢りますよ」

日　向「すみません。じゃあお水を」

遥「（笑って）すごい遠慮してんじゃん」

遥、水を買い、日向に渡す。

日　向「ありがとうございます」

×　×　×

遥と日向、自動販売機の前のベンチに座る。

遥「変な仕事ですよね。人生代行サービスって」

日　向「確かに珍しいかもしれませんね」

遥「私も今度お願いしようかなー。親戚の集まりとか」

日　向「任せてください」

遥、ふっと笑う。

遥「日向さんの仕事は、色んな人を助けてるんだろうな」

日　向「どうでしょうか」

遥「絶対そうですよ。美雪も、ちゃんと休めてるみたいだし」

日　向「ならよかったです」

遥「あの子とは同期なんですけど、真面目すぎるっていうか、何でも1人で背負おうとするんです。そんなに背中大きく

ないだろって」

日　向「そうですね。この世界って、優しくて真面目な人ほど生きづらい気がします」

遥「なんか分かる気がする。それ」

遥、コーヒーを飲む。

遥「でも美雪は大丈夫だと思います。根は強いと思ってるから」

日　向「…はい」

○　繁華街（夜）

イルミネーションが光り、賑わっている。仕事終わりの日向、周りに目もくれず歩く。

○　日向のアパート・外観（夜）

住宅街の一角。８階建てのマンション。

○　同・中（夜）

日向、帰宅する。とても静かな部屋。

棚の上に、伏せられた写真立て。それをうつろに見つめる日向。

日　向「ただいま」

日向、力なくベッドに倒れ込む。

○　テレビ局・スタジオ（朝）

生放送の準備をしている。忙しく動くスタッフの

中で、ぼーっと立っている日向。

本　村「天野」

日　向「あ、はい」

本　村「ぼーっとしてどうした。らしくないな」

日　向「(笑って) すみません」

○　美雪のアパート・中

美雪、つまらなさそうにゲームをする。

思い立ったようにコントローラーを置き、

美　雪「ダメだ！なんか、このままじゃダメだ」

×　×　×

キッチンに立つ美雪。

慣れない手つきでじゃがいもを切る。スマホでレシピを確認し、鍋で具材を煮込む。

美　雪「わっ」

鍋から汁が噴き出し、慌てて火を調整する。

○　テレビ局の前(夜)

日向、疲れた様子で出てくる。

向かいに、紙袋を持って、顔を隠すように立っている美雪。日向、驚いて駆け寄る。

日　向「美雪さん？どうしたんですか？」

美雪、降り向き、紙袋を差し出す。

美　雪「これ」

中身は、タッパーに入った肉じゃが。
日向、驚いて、
日　向「これ、僕に？美雪さんが作ったんですか？」
美　雪「はい。料理は得意じゃないので美味しくないかもしれないですけど。勝手にすみません。嫌だったら捨ててください」
だんだんと俯く美雪。
日　向「これを渡すためにわざわざ来たんですか？」
美雪、恥ずかしそうに俯いたまま。日向、美雪の顔を覗き込んで微笑む。
日　向「ありがとうございます」
美　雪「いえ、こちらこそ…」
日　向「駅まで一緒に歩きますか？」
美　雪「はい」

○　道（夜）

電飾のついた木が並ぶ道。
美雪と日向、並んで歩く。
日　向「どうして急に料理を？」
美　雪「ダラダラしているのが申し訳なくなったというか。何か役に立つことしなきゃと思って」
日　向「美雪さんって、休日も気が休まないタイプでしょ。何もしなくていいのに」
美　雪「何もしないって、却って不安になります。私には向いてないかもしれません」
日　向「…なるほど」
美雪、自嘲するように笑う。

美　雪「かといって仕事も、私がいなくても大丈夫なんだって思ったら、もう戻りづらくて。どうしたらいいんでしょうか…」

日向、心配そうに美雪を見た後、前を向く。

日　向「ちゃんと前を見ることです。怖がらずに」

美　雪「え」

日向、照れ臭くなって、

日　向「なんて、僕もまだまだ出来てないんですけど。一緒に頑張りましょう」

美雪、日向に見惚れる。

日　向「あの…」

美　雪「日向さんって、もしかしたら神様なんじゃないかって思う時があります」

日　向「え？」

美　雪「神様が日向さんの姿になって私を助けに来てくれたんじゃないかって」

日向、困ったように笑う。

日　向「僕はただの人間ですよ。残念ですけど」

○　美雪のアパート・中（朝）

美雪、押し入れを漁り、レシピ本を引っ張り出す。

美　雪「あった。結局最初の2個しか作らなかったんだよね」

美雪、懐かしそうにページを捲る。

押し入れから飴が1つ転がって来る。袋がクシャクシャになっている。

美　雪「これ…」

○　《回想》テレビ局・オフィス

美雪、一生懸命にＰＣで映像を編集している。本村、画面を覗く。

本　村「ここ、テロップもっと大きく」

美雪、びびる。

美　雪「はい！すみません」

本村、鼻で笑う。

本　村「戸田。お前は何でも全力でやりすぎだよ」

本村、美雪のデスクに飴を置く。

本　村「バカ真面目は損するぞー」

美雪、驚いて、歩いていく本村を見る。

○　美雪のアパート・中

美雪、飴の袋を開ける。飴が溶けて、袋に貼りついている。

美雪、飴を口に入れる。

美　雪　Ｍ「気付きたくなかったけど、私の周りに１００％悪い人なんていなくて、全部私が招いた結果だ」

○　テレビ局の前（夕）

並んで歩く美雪と日向。日向、紙袋を持っている。

日　向「毎日作って来てくれなくていいんですよ？大変じゃないですか」

美　雪「日向さんのためなら、そこまで大変じゃないんです」

日　向「どうしてですか？」

美　雪「私は日向さんに救われたから。少しでもお返しができるなら、これぐらいのことはします」

美雪、微笑む。

美　雪「それに、日向さんが喜んでくれると、嬉しいんです」

日向、驚いた顔で立ち止まり、ゆっくりと美雪の手を握る。

美雪、握られた手を見つめる。

美　雪「どうしたんですか？」

日　向「手、温かいんですね。冷たいんじゃないかと思って」

美雪、少し困惑する。

美　雪「日向さん？」

日向、はっとして、手を離す。

日　向「ごめんなさい」

美雪、日向の手を掴む。

美　雪「大丈夫です」

日向、驚くが、そっと手を離させる。悲しい顔の美雪。

２人、目を合わせず気まずい空気。

○　《回想》同・中

引っ越したての綺麗な部屋。

影山千春（２３）、棚に写真立てを飾る。日向と千春が顔を寄せて笑っている写真。

日　向「それこの間の？」

千　春「そう。辛いことがあっても、これ見れば頑張れるでしょ？」

日向、微笑んで、千春の頬を両手で包む。

日　向「写真じゃなくて、千春がいるだけで頑張れるよ？」
千　春「（嬉しそうに）やめて」

○　《回想》同・中（夜）

千春、疲れた様子で帰宅する。

千　春「ただいま」
日　向「千春。おかえり！」
日向（２３）、キッチンから出てきて、千春の手を握る。
日　向「手冷た！先お風呂入りな？」
千　春「何か食べたい…」
日　向「分かった。ちょっと待ってて」

×　×　×

千春、温かいミネストローネを食べる。
日向、ＰＣで作業をしている。千春、日向の肩に顎を乗せ、画面を覗く。
千　春「私もリモートありの会社にすればよかった」
日　向「辛かったら辞めてもいいんだよ」
千　春「辞めない。辛いのは日向も一緒でしょ。生活費は２人で稼ごうって決めたじゃん」
日向、千春の頭を撫でる。
日　向「千春のそういうところ好きだよ。今度の休みは千春の行きたい所行こう」
千　春「うん。ありがと」
千春、どこか浮かない表情。

○　日向のアパート・中（夜）

電子レンジがピーピーと鳴る。日向、温めたタッパーを取り出す。

日向、１人には大きすぎるテーブルで美雪の作った料理を食べる。

次第に涙が溢れ、嗚咽する。

○　喫茶店・外観

小さな店。店先にクリスマスツリーが飾られている。

○　同・中

生放送の最中。

源、いちごパフェを食べる。

源「うーん。甘酸っぱくて美味しいです」

喫茶店の店長、陰から撮影を見守る。

日　向「助かりました。店長が取材ＯＫしてくれて」

店　長「こちらこそ日向くんにはお世話になったからね。テレビってこんな感じで放送するんだね」

日向、頭を痛そうに押さえる。

店　長「日向くん？大丈夫？」

日向、笑顔を作る。

日　向「あ、はい」

本　村「おい。こっち手伝って」

日　向「はい！」

店長、日向に感心した様子。

×　　×　　×

本　村「ＯＫ。一回休憩入ります」

スタッフが昼食をとり始める。

遥、機材を置き、現場を離れる。

日向、頭を押さえ、フラフラと歩いている。

○　カフェ・中

席に座って待つ美雪。遥、やって来て、

遥「ごめんお待たせ。何？用事って」

美　雪「明日の放送の資料、持ってる？」

遥「持ってるけど、なんで？」

美　雪「もう、代わってもらうのやめようと思って」

遥、みるみる表情が明るくなる。

遥「偉いよ美雪！資料ね。待って今出す」

遥、鞄を漁る。

美雪のスマホに着信。

遥「嬉しいなあ。でもなんで急に？」

遥、鞄から資料を引っ張り出す。

遥「あ、分かった。貯金が尽きたんでしょ。当たり？」

美　雪「日向さんが倒れたって」

遥「え？」

美雪、スマホの通話画面を見つめ、呆然としている。

○　カフェ～道

走る美雪。慌てて追いかける遥。

遥「美雪！落ち着いて！」

美　雪「どうしよう、私のせいだ。私が代わってもらったから…」

○　《回想》橋（夜）

スーツ姿の千春、橋の上から水面を見ている。

静かに頬を涙が伝う。

○　《回想》日向のアパート・中（夜）

日向、キッチンで料理をしている。スマホに着信。

日　向「もしもし千春？」

千　春　の　声「日向、ごめん」

日　向「（笑って）何が」

千　春　の　声「やっぱり無理になっちゃった」

日　向「え？」

千　春　の　声「（泣きながら）ごめんね…大好き」

電話が切れる。日向、火も消さずに外に出る。

○　《回想》道

日向、無我夢中で走り、千春を探す。

日　向「千春！千春！」

○　病院・病室（夕）

日向、はっと目を覚ます。ベッドの上に寝ている。
神田麻子（４０）、日向の顔を覗く。

神　田「気が付いた？」

日　向「神田さん」

日向、病室を見回す。

神　田「疲れが出たんでしょうって。最近ろくに寝てなかったんじゃない？クリスマスなのに災難だねえ」

神田、窓の外を見る。楽しそうに歩く人々。

日　向「すみません」

神　田「全くこんな無茶して。自分が倒れちゃ意味ないでしょう」

日　向「助けたかったんです。あの人のこと」

神　田「…彼女に似てる？」

日　向「…」

ドアがノックされる。美雪、遅れて遥が病室に入ってくる。

美　雪「…日向さん」

遥「大丈夫ですか？」

神　田「こんばんは」

美　雪「電話をくれた方ですか？」

神田、美雪に名刺を渡す。

神　田「はい。人生代行サービス代表の神田です」

美　雪「あ、お世話になってます」

神　田「この度はご迷惑をお掛けし申し訳ございません」

神田、美雪に頭を下げる。美雪、戸惑う。

神　田「今回はこちらの都合でのサービス中断となりますので、天野の代わりの者を手配できますが、どういたします

か？」

美雪、ムッとする。

美　雪「いりません。もういいんです」

美雪、日向のベッドに駆け寄る。日向、弱々しく笑う。

日　向「こんにちは」

美雪、悲しい顔。

美　雪「無理してたなら、教えてほしかったです」

日　向「…ごめんなさい」

美　雪「なんで私なんかのために、ここまでするんですか？」

日向、目を逸らす。

美　雪「日向さんって時々、すごく悲しそうに見える」

日　向「え？」

美　雪「教えてくれませんか？日向さんがこの仕事をしている理由」

遥と神田、心配そうに2人を見る。

日　向「美雪さんみたいな人を助けたいからですよ」

美　雪「私なんてただの他人じゃないですか。そんなの、あなたの人生を犠牲にする理由にならない」

日向、驚く。

遥「行こう、美雪。日向さんお大事にね」

遥、美雪の手を引っ張り部屋を出る。

○　同・表（夕）

美雪、遥の手を振りほどく。

美　雪「遥。どうしたの？」

遥「どうしたのはこっちの台詞だよ。誰にでも秘密にしたいこと

ぐらいあるの分かるでしょ。…大丈夫？」

美雪、冷静を取り戻す。

美　雪「ごめん」

遥「1人で帰れる？」

美　雪「うん」

○　道（夜）

美雪、呆然と立ち尽くす。

イルミネーションの光が少しずつ消える。

○　コンビニ・表（深夜）

美雪、祠の前にうずくまって泣く。

美　雪　M「本当に、神様なんているんでしょうか？いるなら、こんな人生はあんまりです」

後藤、安いサンタ帽を被り、ゴミ袋を持って出てくる。美雪に気づいて、

後　藤「そこで泣かないでもらえますか」

美　雪「あっ、すみません…」

後藤、ゴミを捨てながら、美雪に蔑むような視線を向ける。

後　藤「毎日毎日、何が祀られてるかも知らずに、よく手なんて合わせられますね」

美　雪「え…」

後　藤「防犯カメラに映ってるんすよ」

美　雪「ええっ！…すみません」

○　同・中（深夜）

美雪、店に入り、商品棚を見る。ほとんどの食品が売り切れている。

美雪、日用品などを適当にカゴに入れてレジに向かう。

後　藤「１５８０円です」

支払いをする美雪。

後　藤「あ、今キャンペーンやってて。くじ引いてください」

後藤、後ろの台からくじ引きの箱を取る。美雪、くじを引いて後藤に渡す。

後　藤「ハズレっすね。残念」

美雪、独り言のように、

美　雪「…最悪」

後　藤「はい？そんなに景品欲しかったすか？」

○　同・表（深夜）

店に近付く強盗犯の後ろ姿。

○　病院・病室（深夜）

神田、椅子に腰掛け、読書している。

日　向「帰らないんですか？」

神　田「もうちょっとしたらね」

日向、神田を見つめる。

日　向「…神田さん」

神　田「んー？」

日　向「どこまでいけば、人を救ったって言えるんですか」
神　田「難しい質問だねえ」
日　向「最近よく考えるんです。救うってどういうことなのか」
　　神田、本を閉じ、日向の方を向く。
日　向「例えば、目の前であの世に飛び込もうとしている人を引き止めたら、救ったことになるんでしょうか」
神　田「…分からないな」
日　向「あの日、美雪さんは死んでも構わないと言ったんです。でも僕は彼女を無理やり助けた」
神　田「うん」
　　神田、顔色ひとつ変えず話を聞いている。
日　向「助けたいって、結局、僕のワガママでしかないんです」
　　日向、悔しさに耐えるように俯く。
日　向「人生代行サービスなんて、本当に人を助けることはできないって、少しだけ、思ってしまうことがあります」

○　コンビニ・中（深夜）

　　突然、入口から強盗犯が入ってくる。
強　盗　犯「金を出せ！」
　　あ然とする美雪と後藤。
　　強盗犯、美雪に狙いを定めると、捕まえて首元にナイフを当てる。
強　盗　犯「レジの金全部出せよ。早くしろ！」
　　戦慄する美雪。
美　雪　M「最悪」

○　病院・病室（深夜）

神田、荷物をまとめる。

神　田「確かに人生代行は確実に人を救えるものじゃない。それでも、可能性があるなら助ける。助けたいって気持ちがエゴでも何でも構わない。と私は思うよ」

ドアに向かう神田。

日　向「どうして…」

神田、振り向く。

神　田「死んだ人は生き返らないからね」

日向、ぎくりとする。

神　田「じゃあお大事に。ちゃんと寝なよ」

神田、部屋を出ていく。

○　コンビニ・中（深夜）

美雪、体が震える。

美　雪　M「神様。助けてください。本当に神様がいるのなら」

美　雪「（ぽつりと）なんで黙って見てるんですか」

後藤、はっとする。

強　盗　犯「喋るな！」

後藤、レジ台の裏にある通報ボタンを押す。

美雪、ぎゅっと目を瞑る。

美　雪「ああー！離せ！」

美雪、強盗犯を振り払おうと暴れる。

後　藤「危ない！」

後藤、レジ台を乗り越え、なんとか強盗犯の腕を掴む。

美　雪「今死んだら、全部無駄になるの！」

後藤、驚いて美雪を見る。

○　同・表（深夜）

パトカーが停まっている。

○　同・中（深夜）

警察官が店内を確認している。美雪と後藤、入口の前に立つ。

美　雪「ありがとうございました」

後　藤「…お客さん、やっぱり変な人っすね」

美雪、不思議そうな顔。

後　藤「あの状況で暴れるなんて普通じゃないっすよ」

美　雪「…とにかく、死にたくないって思ったんです」

後藤、少し驚いた顔。

美　雪「今生きてるのが奇跡みたいです」

後　藤「何すかそれ」

美　雪「きっと神様のおかげですね。…なんて」

美雪、拝むポーズをする。

後藤、逡巡する。

後　藤「あの祠、神様じゃないっすよ」

美　雪「え？」

後　藤「あれ、ゴミの不法投棄があまりにも多いからって店長が置いただけで、何も祀られてないんすよ」

美雪、面食らって、

美　雪「そんな…」

後　藤「だから、あなたが今生きてるのは神様のおかげじゃない。

自分と、あとちょっとだけ俺のおかげ」
美雪、高揚した表情で後藤を見つめる。

○　道（深夜）

美雪、脇目も振らず走っている。
一生懸命な息遣い。

○　病院・病室（深夜）

日向、窓から空を見る。暗い顔。
廊下を駆けてくる足音。ドアが開く。

美　雪「日向さん！」
日向、振り向き驚く。

日　向「どうしたんですか？あ、忘れ物とか」
美雪、息切れしている。

美　雪「やっぱり伝えたいことがあります。今言わないと、後悔する気がして」
美雪、日向に近づく。

美　雪「私、日向さんを助けたいんです」

日　向「え？」

美　雪「日向さんが何を抱えてるか知らないけど、もう悲しそうな顔してるのは見たくないです」

日　向「…嬉しいけど、僕は全然元気ですよ」
美雪、悔しそうな顔。

美　雪「助けてって言うことは情けないことじゃないって、生きる強さだって、日向さんが言ってくれたじゃないですか」
日向、眉を下げて美雪を見つめる。

日　向「どうして僕にここまでするんですか？」
美　雪「好きなんです！日向さんが」
日向、驚いた顔。
美　雪「私を信じてくれませんか？…助けてって、言ってください」
沈黙。
日　向「…助けられなかった人がいました」
美　雪「え」
日　向「何よりも大切な人で、その人だけは失いたくなかった。でも僕は、一番近くにいたのに何もできなかった」
日向、涙を堪える。美雪、悲しそうな顔。
日　向「それからこの仕事を見つけて、同じような人を救えるかもって」
美　雪「…そうだったんですね」
日　向「いや、本当は、救われたかった」
美　雪「え？」
日　向「同じような人を助けて、助けられなかった自分を救いたい、そんな気持ちでした。…今更何をしても千春は帰ってこないのに」
美雪、言葉を失う。日向の肩に触れようとするが、迷って手を下ろす。
空が白み始める。
美　雪「それって悪いことなんですか？」
日　向「…へ」
美　雪「過去の失敗をやり直したいって、それで救われたいって当たり前のことじゃないですか」
日向、涙が込み上げる。
美　雪「過去があったから今の日向さんがいるんです。私を助け

てくれた、神様みたいな人です」

日向、小さく首を振りながら、俯く。

日　向「神様なんて言わないでください」

美　雪「分かってます。日向さんは私と同じただの人間ですよね。人間は弱いから、誰かと半分こしながら生きてもいいと思うんです」

美雪、窓の外を眺める。

美　雪「私やっとわかりました。私も、日向さんも、幸せになっていいんですよ」

日向、葛藤する表情で美雪を見る。その視線の先の空に見惚れる。

○　テレビ局・会議室(朝)

勢いよく頭を下げる美雪。

美　雪「大変ご迷惑をお掛けしました！責任をとって本日でやめさせていただきます！」

美雪、辞表を差し出す。あ然とした様子の本村と遥、スタッフ達。

本　村「それ責任の取り方違うだろ」

美　雪「今まで大変お世話になりました！」

美雪、さらに辞表を押し付ける。

本　村「…まあ向いてなかったしいいんじゃない」

本村、辞表を受け取る。

美雪、嬉しそうな顔でお辞儀し、オフィスを出ていく。遥、急いで追いかける。

○　同・廊下（朝）

颯爽と歩く美雪。

遥、美雪を追いかけて早足で歩く。

遥「ちょっと！話と違うじゃん」

美　雪「ごめん。やっぱりこの仕事にこだわる必要ないと思って」

遥「はあ？」

美雪、立ち止まり、遥の方を向く。

美　雪「遥。今までずっと心配してくれてたこと知ってる」

遥「当たり前でしょ？」

美　雪「入社してから、遥に助けられたこと何回もあったよ。遥のおかげでここまで頑張ってこれた。本当にありがとう」

遥「だから当たり前なんだって、そんなの」

美　雪「これからも遥のこと応援してるし、番組も見るよ」

遥、少し悲しそうに目線を落とす。

遥「別に最後じゃないんだからそういうのやめてよ」

美　雪「そうだね」

遥、気持ちを整理するようにふーっと息を吐く。

遥「で、これからどうすんのよ？」

美　雪「うーん。仕事探しながら、アルバイトかな」

遥「…あんたって変なところで楽観的なんだね」

美雪、少し得意げに笑う。

○　コンビニ・中（日替わり）

店員の制服を着た美雪、レジの前に立つ。

美　雪「いらっしゃいませ」

美雪、レジを打ち、会計をする。

美　雪「２３０円のお返しです」

美雪、小銭を落とす。小銭が床を転がり散らばっていく。

美　雪「あっ。すみません」

美雪、レジ台を出て、小銭を拾う。

客が拾うのを手伝う。

美　雪　M「もっと早く気付くべきだった」

美雪、客に向かって申し訳なさそうに、でも嬉しそうに笑う。

美　雪「ありがとうございます」

美　雪　M「私を助けてくれるのは、神様じゃなくて、いつだって人間だった。きっと神様はそんな世界を作ったんだ」

○　墓地（日替わり）

しゃがんで手を合わせる美雪と日向。

その前には千春の墓。バケツやブラシなど、墓石掃除の道具が置かれている。

日　向「手伝ってくれて助かりました」

美　雪「いえいえ」

美雪、わざとらしくスマホを気にする。

美　雪「あ、電話だ。ちょっと失礼します」

美雪、通路を歩いて日向から離れて行く。

日向、千春の墓を見つめる。

日　向「…ごめん。来るの遅くなって。もっと早く来れたらよかったんだけど。お花、何がいいか迷っちゃってさ。やっと見つけられそうだよ」

エーデルワイスの花が供えられている。

日　向「俺も、大好きだよ」

美雪、歩いて戻ってくる。

美　雪「日向さん。お腹空いてません？」

日向、美雪に笑顔を向ける。

日　向「…空いてます」

美　雪「よし。じゃあ、大丈夫だったら行きましょう」

美雪、日向に手を差し出す。

日向、美雪の手を握り、立ち上がる。

手を離し、並んで歩き出す２人。

（了）